

令和7年8月1日



vol. 07

2025.08.01 Summer  
Jozaisan Hondoji public relations

jozai ryoju sen

# 常在靈鷲山

Obon no kisetsu kaettekuru gosenzosama mo kitto yomitai... sonna hondoji no jiho wo issatsu dozo



Hondoji yoi tera ikitai otera sonnna kimochi ni kitto nareru issatsu wo anata ni otodoke itashi masu

「月日は百代の過客にして、

行かふ年も又旅人なり。」

― 月日は永遠の旅人であり、

過ぎてはまた来る年もまた

旅人である―。

江戸時代の俳人、松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』の冒頭です。

月日が永遠の旅人であるならば、月日という大きな流れに身を任せるようにして漂泊するわたしたちも、やはり旅人なのでしょうか？

旅先に向かう電車の中、窓の外を流れる景色は時々刻々と移り変わってゆきます。同様に、わたしたちの過ごす日々の一瞬一瞬も一度きりであり、すべてが一期一会です。

ですが、日々の生活の中で起こる一々すべてに對して「一期一会だなあ」と意識が向くことはあまり無いですね。

「昔はあれだけ喜んだり、驚いたり、怒ったり、悲しんだり、感動したりと、心動かされたのに歳を重ねるにしたがって何とも思わなくなってしまう―。」

そんな経験は、ありませんか？

人をはじめとする生き物全般には、似たような刺激を長期間にわたって繰り返し受けると、次第にその刺激に対する反応が鈍くなるという性質があります。これを心理学や動物行動学の専門用語で「馴化（じゆんか）」と言います。

要は「慣れてしまう」ということです。

わたしたちを取り巻く環境は、止まること無く、絶えず変化続けています。しかし、特別目につくような変化でない限り、徐々に意識が向かなくなっていくのです。

ちょうど境内のハスが見頃を迎えておりますが、そのつぼみは昨日今日で出来るのではなく、半月ほどかかって花芽が成長した結果、ようやく見頃を迎えるわけです。

徐々に変化してゆく「過程」には注意が向かず結果ばかりに目が行ってしまう―。

すべての変化が一期一会なのですが、その一期一会を「あたりまえ」と錯覚してしまうのは、わたしたち人間の性（さが）と言えるかもしれません―。





今年は太平洋戦争終結八十年の節目の年です。

昭和二十年の終戦から今日に至るまで、日本は平和国家の道をひたむきに歩んできました。

たった八十年かもしれませんが。

しかし、されど八十年です。

翻ってみれば、明治元年から昭和二十年に至るまでの七十八年間に日本はいくつもの「戦争」を経験しました。

そういうことを踏まえると、激動の歴史の果てに辿り着いた、この八十年間の平穏というのは本当に感慨深いものがあります。

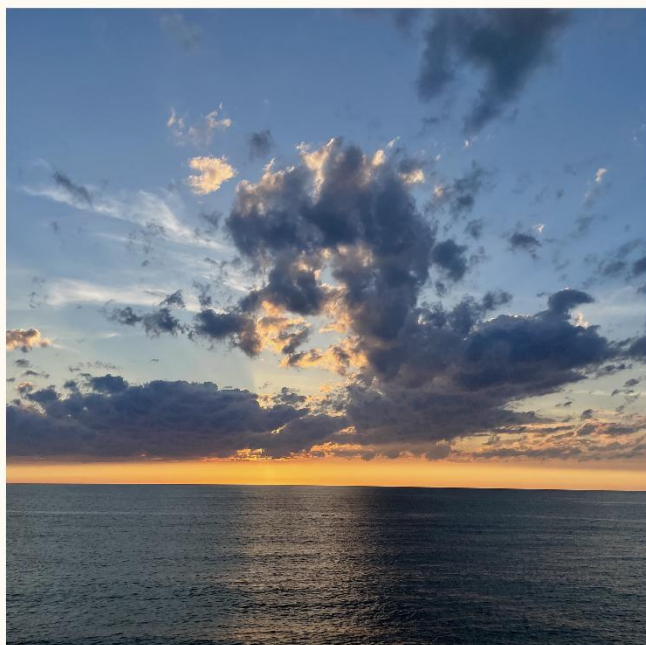
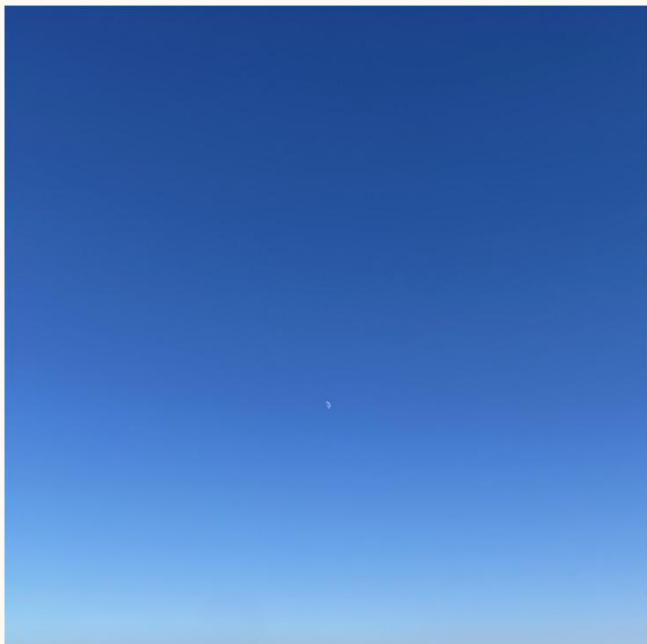
平和な、日常—。

戦後生まれの世代には「あたりまえ」です。

しかし、日本国内でそう思っている間にも、世界の情勢は時々刻々と変化しています。

現在も、ウクライナやミャンマー、ガザ地区では戦闘が繰り広げられています。

すっかり慣れてしまいましたが、わたしたちが享受している「平和」というのは、たまたま幸運にも、日本とその周辺でそのような状態が続いていることに他ならないのです。



「あたりまえ」を「あたりまえ」としない。  
「蘊蓄云々」と題して、人間の性（さが）に  
抗うように、この「あたりまえ」を見つめ直し  
てみたいと思います。

手掛かりは仏教の智慧と蘊蓄です。

日常に氾濫する「あたりまえ」の大海原へ、  
漕ぎ出して行きましょう。

# 七面大明神大祭

南無七面大明神

南無七面大明神

今回は、ちょうど夏の時期にお祭りが行われる「七面さま」について、ご紹介します。

正式なお名前は「七面大明神（しちめんたいみょうじん）」もしくは「七面天女（しちめんてんにょ）」と言います。今日では全国各地の日蓮宗寺院にて祀られ、広く信仰を集めておりますが、元々は日蓮宗の総本山である身延山を守護する女神さまとして、山梨県南巨摩郡にある標高一九八二メートルの「七面山」の山頂にある敬慎院（けいしんいん）にお祀りされたのが始まりです。

七面さまには次のような伝承があります。

日蓮聖人が身延山に隠棲されて数年経った建治三年（一二七七）九月のこと。地元の方々にお説法をしていた折に、聴聞に訪れたお弟子さんや信者さんたちの中に、熱心にお説法に耳を傾ける女性がおりました。ただ、明らかにその辺では見かけない姿であり、同じく聴聞していた地元領主の波木井実長（はきいさねなが）さんを始め、その場の人々はいぶかしく思いました。それを察した日蓮聖人は「あなたの本当の姿を見せてあげなさい」と



言って、女性に花瓶の水をそそいだところ、その女性は身の丈三メートルほどの龍の姿になり、自身の正体を「七面山に住む七面天女」と明かし「至心に祈るならば、心の安らぎと満足を与えるでしょう」と言い残して七面山の方に飛び去って行きました。

その後、永仁五年（一二九七）九月十九日に、日蓮聖人の弟子の日朗上人が波木井実長さんと一緒に七面山に登り、七面天女を祀ったとされ、七面山ではこの日を開創の日としています。

当山の七面さまは春から秋にかけて、高台の七面堂に奉安されておりますが、御尊像が

納められているお厨子の底に寛延三年（一七五〇）の記載があります。実は大変歴史ある御尊像なのです。

そんな当山の七面さまですが、その靈驗を伝えるお話が残っております。

今から約百年前の大正十三年の夏、当地は稀に見る早魃に見舞われました。この辺一帯は昔から稲作が盛んですから、状況を重く見た当時の住職、当山第四十七世の仙立院日洪上人は、地元有志と共に七面大明神のお堂に泊まり込み、三日三晩にわたり不眠不休で雨乞いのお祈りを捧げました。満願の日、ついにその願いが通じたのか、東の空から黒雲が広がり大粒の雨が降った、とのことでした。

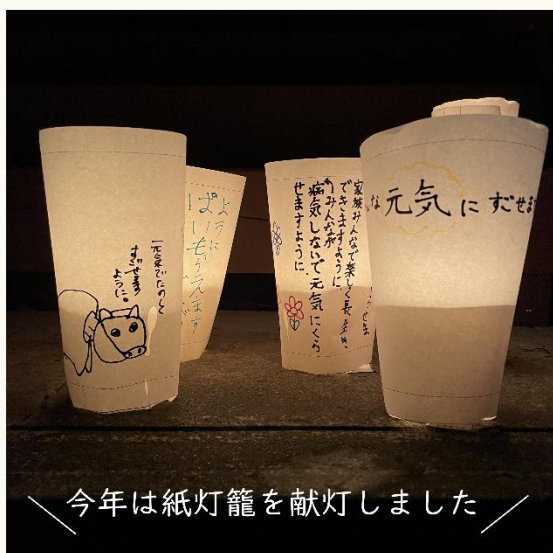
今日の常識から考えますと、偏西風の影響で天気は西から東へと移りますから、「東の空から雨雲が広がる」というのは、気象学的にあり得ない現象です。しかし、当山には、その際に撮影された写真が現存します。

写真の添え書きには「大正十三年八月十九日より二十二日に至る三日三夜 雨乞祈禱会参籠者祈念」とあります。また写真の裏には「大正十三年八月二十三日午後四時撮影」



【上】大正13年8月23日午後4時に雨乞成就を記念して撮影された。

【左】同日、「雨乞成満放楽」として山鉦の巡行が行われた。



／ 今年は紙灯籠を献灯しました ／

とありますので、雨乞いの成就を記念して撮影された写真であることが分かります。伝承というのは、真偽がよく分からない事例が多いですが、当山の七面さまに関しては写真と文章併せて記録が残っておりますので、かなり信憑性が高いと言えるのではないのでしょうか。

当山では、毎年八月十六日、十七日の二日間にわたって七面さまの大祭を厳修します。令和の今日も、高台から当地一帯を見守ってくださいている七面さまと一緒に手を合わせませんか？

## 年中行事のご案内

八月一日(金)午後一時半 魂迎会施餓鬼法要  
 八月十六日(土)午後七時 七面大明神大祭(逮夜)  
 八月十七日(日)午後二時 七面大明神大祭  
 九月二十二日(月)午後二時 稻荷大明神祭礼  
 九月二十三日(火)午後二時 秋季彼岸会法要  
 十一月九日(日)午前十一時 祠堂法要  
 十一月九日(日)午後一時 御会式

お誘い合わせの上、ご参詣ください

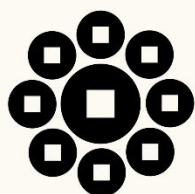


当山のハスは15年ほど前に山梨県身延町のとある方からいただいたものです。その後10年ほどそのままになっていたのですが、コロナ禍の令和2年に暇を持て余していた副住職が気まぐれに株分けをしたことがきっかけとなり、あれよあれよという間に20株まで増えました。「お寺の名物になればいいなあ」という当初の目論見通りにはなったかは、さて置いて。今年もたくさん花が咲いて嬉しい限りです。

## 編集後記

最後までお読みいただき、ありがとうございます。もはや遅延が常態化し、「季刊とは？」となつてしまっている当山の寺報『常在霊鷲山』ですが、第七号もなんとか発行に漕ぎつけることが出来ました。俗に「フリーペーパー」と呼ばれる印刷媒体を目にする、思わず手が伸びてしまう性分なのですが、最近では全ページカラー刷りで、ものすごくクオリティーの高い、まるで雑誌のようなフリーペーパーを目にすることが増えました。しかも、毎月欠かさず刊行しているとのことで、季刊誌なのに悲鳴を上げている自分が本当に情けない限りです。

今回から新たに「蘊蓄云々」と題した記事を書くことになりました。テーマは「あたりまえを見つめ直す」です。原稿を書きながら、自分でもたくさんの気づきがあり、色々と日常を見つめ直す大変良い機会になりました。近く、お寺のホームページにも「蘊蓄云々」というブログを開設する予定です。ですから、そちらの方もお時間があつた時に覗いていただけますと、筆者として冥利に尽きます。



常在山本土寺寺報『常在霊鷲山 Vol.7』

発行所 常在山本土寺 編集 法花堂正匡

〒929-1601

石川県鹿島郡中能登町西馬場ユ部三番地

電話 0767-72-2235

FAX 0767-72-2281

ホームページ

<https://www.jozaisan.org>

